西照

西照寺寺報「さいしょう」 第32号
2014年 1月 6日
発行 浄土真宗本願寺派 西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
郵便振替口座 00780-8-8185 西照寺
西照寺ホームページ http://nisitera.eek.jp

御正忌報恩講勤修

左記のとおり今年度の御正忌報恩講お勤めいたします
お参りくださいませ

おつとめの時間

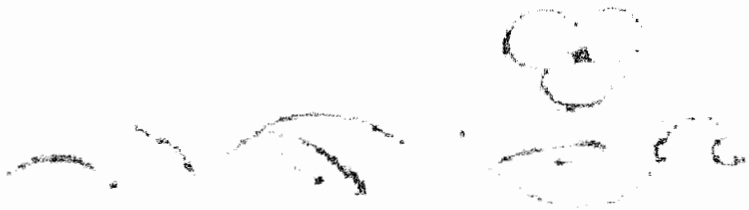
一月 十五日（水） 午後二時～

十六日（木） 午前九時半～

※十五日の御初夜(午後七時)のお勤めはありません。

布教使 林 史樹 師 高岡市伏木要願寺住職

西谷山 西照寺



アリス君とコペル君

児童文学者でありジャーナリストでもあった吉野源三郎という方がおられました。

明治三十二年のお生まれでして、昭和十四年に明治大学文学部教授に就任。戦後は、岩波書店の雑誌「世界」の初代編集長を、岩波書店常務取締役、日本ジャーナリスト会議初代議長などを歴任し、昭和五十六年に八十二歳でお亡くなりになっています。昭和を代表する進歩的知識人と評されていました。

この吉野さんが、昭和十二年に「日本少国民文庫」の一冊として、「君たちはどう生きるか」を刊行しました。

昭和十二年といえば、アジア大陸への進攻と軍国主義の高鳴りのなか、七月に蘆溝橋事件が起こり、日中戦争がはじまった年でした。そのような自由が疎外されていく国粋主義的時勢の中、次の時代を担う少年少女に、人生何を基軸としてどこに向かって生きていくべきなのか、ということを問いかけた作品であったように思います。平成十五年の「私の好きな岩波文庫１００」で五位にランクされるなど、今日もなお評価が高く私たちに大切な示唆を与えてくれています。

さて、この本は、十五歳の少年コペル君が日頃の疑問を投げかけ、それに叔父さんが応答するという、対話をとおした構成になっています。その中で印象に残った話を紹介します。

ある日コペル君は、叔父さんからニュートンの話を聞いて、粉ミルクの缶のことを考えました。うちでおせんべいやビスケットを入れておいているものです。輸入品粉ミルク「ラクトーゲン」の大きな缶で、オーストラリアの地図と牛の絵が描いてあります。

この缶は、赤ちゃんの時おかあさんの乳がたりなくて毎日ラクトーゲンを飲んで育ったのだといつかお母さんから聞いた、その時のものです。その話を聞いたとき、「じゃ、オーストリアの牛も僕のお母さんかな」と言ったことを覚えています。

そうしたら、ニュートンの話を思い出しました。

高いところからリンゴが落ちるのを見て、もっともっと高いところにあったらどうだろうかと考えてみた。なぜ月は落ちてこないのだろう。「どこまでも考えつめていくうちに、ニュートンはすばらしい考えを思いついたのだ」と叔父さんは言っていました。

それで、コペル君も粉ミルクに関係のあることを、とことん考えつめていこうと思いました。

オーストラリアの牛から、赤ちゃんであったコペル君の口に粉ミル

クがはいるまでのことを、順々に思ってみました。すると、あきれるほどのたくさんの人間が出てくるんです。ためしに書いてみます。

「㈠ 粉ミルクが日本に来るまで。

牛、牛の世話をする人、乳をしぼる人、それを工場に運ぶ人、工場で粉ミルクにする人、かんにつめる人、かんを荷造りする人、それをトラックかなんかで鉄道にはこぶ人、汽車に積みこむ人、汽車を動かす人、汽車から港へ運ぶ人、汽船に積みこむ人、汽船を動かす人。

㈡ 粉ミルクが日本に来てから。

汽船から荷をおろす人、それを倉庫にはこぶ人、倉庫の番人、売りさばきの商人、広告をする人、小売りの薬屋、薬屋までかんをはこぶ人、薬屋の主人、小僧、この小僧がうちの台所までもって来ます。」

それから、工場や汽車や汽船を作った人……。何千人だか、何万人だか数知れない人が僕につながっていることを発見します。

さらに考えを進めていくと、電灯や、時計や、机や、畳や、そのほか、どれもみんなラクトーゲンと同じでした。数えきれない大勢の人間が、うしろにぞろぞろつながっています。

人間それぞれの分子は、みんな、見たこともあったこともない大勢の人が網の目のようにつながっている。これを僕は「人間分子、網目（あみめ）の法則」ということにしました。

そのことを叔父さんに報告します。

すると叔父さんは、そのことはすでにちゃんと発見した人はいるが、コペル君が気づいたことは非常にすばらしいことだとよろこんでくれました。

全く見ず知らずの人ばかりだけれど、人間同志、地球を包んでしまうような網目の関係を作り上げている。それなのに、まだまだ本当に人間らしい関係になっていない。いまだに争いが絶えない。

人間らしい関係とは、お母さんが君のためにしてくれているように、相手のためにつくしていくことが、自分の喜びであるような関係だ。人間同志、お互いに好意をつくし、それを喜びとする関係である。

たとえ「赤の他人」の間（あいだ）にだって、ちゃんと人間らしい関係を打ちたててゆくのが本当だ、と叔父さんは教えてくれました。

概略、こんな話です。

（裏面に続く）

（中面からの続き）

私は、これを読んだとき、吉野さんがなぜ主人公をコペル君という名前にしたのか、頷けたような気がしました。コペル君は、勿論コペルニクスからきた名だと思います。ご承知のように、コペルニクスは地動説を唱えた人です。それまでは、アリストテレス以来太陽が地球の周りをまわっているという天動説が主流でした。普通に見たらそのようにしか見えません。みんなアリス君でした。ところが、よくよく考え観察していくと地球が回っているのが真実であったわけです。

私は、これは自分の命で、自分の力で生きているように思っています。普段はそう思っています。だからアリス君なのでしょう。しかし、よくよく自分の命の背景を観察していくと、数えることもできない多くの人とのつながりや支えがありました。それだけではありません。動植物や大自然の恵みによって、本来自分のものでない命をたまたま自分の命として与えられ、成り立っていました。こちらが真実です。この真実を人生の基軸に据えて人間らしい関係を願って生きていくことが人間としての生き方ではないのかということを、吉野さんはコペル君の名に込めて伝えようとしてくださったのではないか。

私にはそのように受け取れました。

報恩の日

私の命の背景、命の真実を悟った方に、阿弥陀如来という仏がおられると釈尊が教えてくださいました。その阿弥陀如来は、すべての人を救うことが、あなたを救うことが仏の願いであり喜びだ、とその心とはたらきを念仏こめて私に届けてくださっています。

親鸞聖人は、その阿弥陀の願いに感動し、そこに自分の生死を超えていく普遍的な営みを見い出されたのではないか。そして、その呼びかけを自分の基軸に据えて、他者のためにつくしていくことが、自分の喜びであるような人生を力強く歩んでいかれたのではなかったかと思います。

一月十六日は、新暦になおした親鸞聖人の祥月命日(御正忌)です。その日を機縁に、親鸞さまのご恩徳をしのぶ報恩の集い(報恩講)が営まれてきました。それは同時に阿弥陀如来の救いを深く味わう日であり、先祖をはじめもろもろのご恩を思い、自分の命の背景を深く考える日でもあります。

また、報恩講は、自分自身が自分の命の背景を見失い、自己中心的な欲望のみを満たすことが幸せや喜びと思っていなかったか、アリス君になっていなかったかを見直す日でもあります。合掌　（文責　住職）